

GROUNDSCAPE DESIGN youth 2011 summer

海の博物館&漁村見学会

「海に生きること」

2011.09.23-24



## [趣旨]

東日本大震災から半年が過ぎ、個々に被災地へ赴き取材・調査やボランティア活動を行ったユースメンバーもいるだろう。今回の震災の被害というのは、地震波による揺れの影響ではなく、ほぼ津波が原因だと言っても過言ではない。島国である日本には、漁業で生計を立てている方も多し。過去に幾度となく津波の被害に遭ってきたにもかかわらず、また今回の震災で大きな被害がなかった地域でも今後高い確率で大地震が発生すると言われているにもかかわらず、なぜその地に住み続けるのであろうか。海で暮らし続けることの意義とは何なのか。

## [旅程]

初日は海の博物館にて展示の見学や、学芸員の方との座談会を通して、海に生きることはどういうことかということ学ぶ。2日目は初日に学んだことをもとに、実際に漁村を歩く。ひとつは町が平面的に広がる鳥羽市相違町。もうひとつは町が崖にへばりついたような志摩市大王町。

23日 Fri. 12:00：鳥羽駅集合→レンタカーで海の博物館へ移動

13:00：海の博物館見学

14:30：海の博物館にて座談会

18:00：相違へ移動、懇親会

24日 Sat. 08:00：朝食

09:00：相違町まちあるき

12:30：海女小屋で現役海女さんとお食事

15:00：大王町まちあるき

18:30：鵜方駅にて解散

## [講師]

海の博物館学芸員 平賀様

SOS運動本部 事務局

相違町 現役海女の皆さん

## [当日の様子]

—初日—



23日12時、鳥羽駅に集合し、海の博物館へ。収蔵庫・展示棟を隅々まで見学。展示物や近くの海、建築などを思い思いに見て回ったり、喫茶店で心を頂いたりした。夏の終わりの爽やかな気候で、内部空間のみならず外部空間もとても気持ち良かった。



海の博物館学芸員の平賀さんとSOS運動本部のハタさんをお迎えし、海での暮らしについてお話ししていただいた。漁をしながら生きていくために必要な道具や技術、伝統や地域性、災害を語り伝えることなど、1時間半たっぷり勉強した。



その後、非公開の収蔵庫も案内していただき、大きな木箱のような空間の中で貴重なコレクションを見学した。多彩な漁具と、その周辺に垣間見える漁民たちの生活に思いを馳せた。平賀さんに多くの質問を投げかけたにもかかわらず、全てについて丁寧に答えていただきとても感謝している。



24 日午前は鳥羽市相差町という漁村を歩いた。相差は平面的な漁村で、海岸沿いには大きな堤防がある。港で船のペンキ塗りをしていたおばあさんとお話したり、堤防や海岸、岬を歩いたりして思い思いに過ごした。釣りを楽しむ観光客や、自転車で走り回る元気な子供たちが印象的だった。



昼食は相差の現役海女さんたちと新鮮な魚介類をいただいた。鳥羽は日本で一番海女さんが多く、中でも相差には多数の海女さんが住んでいる。取れたての魚介類を陽気な海女さんたちが焼いて、その場でいただくという贅沢をした。



午後は志摩市大王町を歩く。相差とは異なり、階段の多いそそり立つ漁村である。灯台から街を一望した後、階段を登ったり入り組んだ小道を歩いたり、波の音を聞いて考え事をしたり、愉快的な街の方々とお話することもでき、とても充実した時間だった。

## [参加者から感想]

□細見玲子／武庫川女子大学大学院修士2年

「減災」という言葉が3.11以降さかんに言われている。都市では新鮮な言葉、けれど、地方、特に厳しい自然と隣り合わせで生活している地域では、「減災」の工夫が日常の中に存在しているはず。それを具体的に見てみたいという期待から、見学会に参加しました。

いざ行ってみると高台にあるのは住宅ではなく神社で、海辺の構築物は脆さを感じさせるものばかり。逆に「強い!」という感覚を受けたのは、構築物ではなく、紙芝居とか祭りとか、道端での会話とか神頼みとか、今まで自分が軽く見てきたもの、決定的ではないと思っていたもの、(例えば茨城県牛久市のWSでは「かっぱ祭り」に何の意味があるのかと思ってほとんど提案では触れなかった)にありました。

自分はまだ「ソフト」が何なのかを全然知らないという反省と、無形が実は頑丈だという実感が、今回の見学会の収穫になりました。

海辺の町には「海」という強烈な軸があって、山には山があって、では都市に住む人は何を軸に生活すればいいのか、ともんもんと考え中です。

最後に、海辺で飲むビールは格別においしく、降ってきそうな星空を見上げての歯磨きは最高でした。ありがとうございました。

.....

□中島穰／東京大学大学院景観研究室修士2年

赤福の文字が躍る、蛇行する道を通り、海の博物館へと辿り着いた。

「海に生きること」がテーマの見学会だが、その膨大な量の収蔵品を前にして何をj見ていいのかわからなくなる。ひとまず建物をじっくり見てまわる。天気が良いこともあり、収蔵庫の壁の白さが映える。その後学芸員の方の話聞く。

印象深かったのは津波が来てもここにいる、という話だった。

自分には覚悟を持ってここにいたいという場所があったらどうかと自問する。どこにも行ってしまえる自分だから、過ごした場所にも愛着が薄いのかかもしれない。

学芸員の方と一緒に回った収蔵庫内は、一見海の生活に関係ないものも数多く収められていた。しかし、学芸員の方の言葉からも、収蔵品からも、何気なく過ごしている都会の生活の中にも海が深く繋がっているということに気付いてもらいたいという思いが溢れていた。その展示の一つ一つが、海と人とのせめぎ合いのような関係を凝縮しているようだった。

翌日は相差町と大王町という二つの漁村を歩いた。町の人から何度か声を掛けられる。明るく、健康的で、笑顔が似合う人が多い。80 を過ぎた元海女さんに、こんなにいい海は他にないからまたおいで、と言われ、覚悟と隣り合わせの海の暮らしはそれに見合う豊かさで満ちていることを肌で感じた。

また必ずこの海に会いに来ます。忘れられない旅になりました。

海の博物館の平賀さん、大谷さんをはじめスタッフのみなさん、ありがとうございました。

.....

□加藤俊介／(株)構造計画研究所

<背景>

今回の見学会に参加する背景が二つあった。一つは自分が大学時代にヨットをやっていた海は非常になじみのある場所であるということ。もう一つは 3.11 の震災が起る前に「震災列島」(石黒 耀) という将来起こる可能性がある東海地震を題材にした小説を読んでいたこと。「震災列島」は 3.11 で東北と関東で起こった原発事故・都市機能の停止・そして津波を非常に見事に言い当てていた。東海地域でも地震が起ったらまさにこの小説そのものの状況になることがイメージされてしまい、心配だった。そのような背景を持って参加した。

<海の博物館>

案内して下さった平賀さんの「内藤さんはここにあるものを非常に大切なものと感じ、絶対に残すべきと思ってくれた」「この博物館がなかったら、ここにあるものは全てこの世から消えていただろう」という言葉が印象的だった。内藤さんは以前「記憶の器」というテーマの学生コンペの審査委員長をされていた。内藤さんのいう記憶の器は海の

博物館のことなのだろうか。シンプルにそこにあるものが物理的に残り、人の記憶の中にも残っていくという機能を徹底したのが記憶の器ということなのかな。

<大王町での老人との会話>

途中、港の丘の上でご老人と話す機会があった。ご老人は若い頃にこの地域に大津波が来たことを生々しく話し手下さった。その話を聞くまでまったく知らなかった（自分が無知のためと反省）の다가戦前後に4年連続で1000人以上の死者を出した東海・東南海・鳥取・三河の4大地震があったことが、帰って調べてみて分かった。これは1854の安政東海地震から90年後に連動して起こった地震だそうだ。なんでこんなに大きなことを知らなかったのだろう。

<感想>

この見学会で震災が少しリアリティを持って考えられるようになった。しかし、まだ起こっていない現象のリスクは実感をもって対策をしていくことは難しいように思う。東北地方で紙芝居を使っておばあさんが、津波が起こったらどうしたらいいか伝承しているという話も見学会の中で平賀さんに伺った。今は地震・津波のリスクは顕在化されたけれど、まだ見えていないリスクはすごくたくさんあるのではないだろうか。あまり明るい話ではないけれど、そういったリスクを知っている人が話題を持ち寄って話す場を作れないかと思っている。実感をもって備えていくことは、大事なんじゃなからうか。

.....

□西倉美祝／東京大学工学部建築学科4年

今回の旅行は海の博物館（以下海博）や三重の漁村を回る旅行でした。僕自身としてはその数日前から瀬戸内海を回っており、建築旅行の最後として位置づけていたので、初めて行く海博は非常に楽しみにしているところでした。

しかし、実際に行って体験した海博は僕にはよく分からないものでした。瓦屋根や木造アーチ（？）の門型が巨大な建築に与える繊細さ、PCaには見えない石のようなコンクリート、開口の取り方を初めとした細やかな気配り、そして倉庫に近い建築形態は「大切なものを保存する」という設計者の気持、このようなことを感じはしましたが、それらが博物館として良い解答だったのか、この建築は一体なんのための建築なのか、

そのような自分の中の問いに対して決着がつかないまま、今回はこの博物館を去る事になりました。もしかしたら来場者が極端に少なかったからそのような印象になってしまったのかもしれませんが。大勢の人に使われている、その様子を見たら、全く違うものが見えたのかもしれませんが。しかし、今回の旅行のみに関して言えば、「他の事に我関せずと、ただ大きく存在するために存在する」、そんなたまたまに見えてしまいました。

漁村に関しては、大王崎はとても面白い街だと感じました。僕が住んでいる横浜と似た起伏の多い地形だからか、初めてなのにどことなく懐かしい気持ちにさせる道があったり、それと同時に横浜とは全く違う、哀愁のようなものもあったりと、個人的な体験ではありますが、僕の地元と比較して色々と思うところがありました。道のつくりが面白くて、ついつい、地域の人しか入らないような場所まで行ってしまったり、おばさんに怪訝そうな目で睨まれたり、逆に朗らかにあいさつを交わしたり・・・散歩しているだけで飽きない場所だと思いました。

今回の旅行は僕だけ学部生ということで、年長の方々、特に幹事の太谷さんには色々とお世話になりました。海鮮づくしの食事、どれも美味しかったです。実は貝とか海老、今まではニガテだったんですけど、美味しいところで食べればそんなニガテ関係ないんですね。一緒に旅した楽しいメンバーにも心から感謝しています。どうもありがとうございました。

.....

□永井友梨／東京大学大学院景観研究室修士1年

海の博物館で学芸員の方のお話を伺えたことは非常に有意義だった。展示品・収蔵品の数だけでも圧倒されたが、所狭しと並べられたそれぞれの物の価値、あるいはそれらの物が集積・保管されていること自体の価値は、素人がただ見るだけでは分からない。平賀さんの海への情熱が溢れる解説の後には、展示品を見るのがより楽しくなっただけでなく、普通ならば朽ちて忘れられていったであろう海の文化を記す品々が残されている、この場所の存在意義を強く感じた。

同時に、一般の来館者にはなかなかそれが伝わらないだろうことを残念にも感じた。各展示品を説明するだけに留まらず、海の博物館そのものの価値を理解してもらえるよ



うな情報の提供方法を考えられないだろうかと思う。

漁村をゆっくりと歩けたことも良かった。震災の3か月後、瓦礫の撤去がかなり進んだ頃に被災地を一度だけ訪れたが、被害の大きさを実感するというより、「何もない」ことにただ呆然とするという状態だった。それはおそらく、海に生きる町の姿というものを自分が体験としてほとんど知らなかったことも大きな原因だったと思う。元々の姿が分からないから、津波で何が起こったのか、何が失われたのか、これから何を取り戻していけばいいのか、全くイメージを持てなかったのだ。

だから今回、(もちろん地域が違うので差異も大きいとは思いますが) 漁村を訪れることができたのは重要な体験だったと思う。物理的にも精神的にも海が近くにある暮らしを垣間見ることができたし、また純粹に、漁船の並ぶ風景や大王崎から見た夕日はとても綺麗だった。

ユースの見学会に参加したのは初めてだったが、充実した2日間を過ごすことができた。

……………

□安藤達也／建設技術研究所

<海の暮らしを想う>

なんていうか、あこがれの場所に来ると一度に全部を見るのはもったいないなと思ってしまう。全部見ってしまうとまた来たくなくなってしまうような気がするし、焦って全部見るのもちょっと違う気がする。だから、のんびり気になったところだけを見ていた。また見忘れたところはあとで見に来ればいい。館内の喫茶店でコーヒーを飲んだり、近くの海辺を見にいたり、あこがれの場所を楽しんだ。

海の博物館の話である。

内藤先生の本に書いてあることはある程度知っているつもりでいたけれど、それはやはり建築的なところの話であって、海の博物館の展示内容についてはあたりまえだけど何も知らないなと思った。面白かったのは屋根瓦に象られた「せーまん」と「どーまん」。海女のお守りのしるし。こういう信仰ってすごく土着的でいいな。海女小屋でそういう話を聞けばよかった。舌鼓をうつのに夢中であまり話せなかったのは残念。

船の収蔵庫のほかに、普段は公開されていないその他の漁具収蔵庫の中も今回特別に見せていただいた。学芸員の平賀さんの解説を聞きながらの話はすごく面白かった。漁具はなんとなくこういうものかと想ってみると、実際にどうやって使うのか説明されてみるのでは印象が全然違うのである。

展示されている木造船、麻でできた網、木製の水中のぞき眼鏡、魚籠などはもう今の時代では使うことはないのだろうが（そして、もう作れないのかもしれない。船大工も少なくなったし、そもそも船を作るための工具や材料を作る職人さんが日本にはもう数名しかいないのではないかと、という話にはびっくりした。）、身近な素材を使って物を作る時代の中では一種の完成形に至ったものなのだそう。

プラスチックなどの新しい材料ができて、漁具も一変する。ただ、やっぱり面白いと思うのは、プラスチックの漁船でも地域によって（もちろん用途によっても）形が変わっているという。昔の知恵のある部分は引き継がれているのだと思う。あるいはまた数十年したらプラスチックの船も博物館に展示される時代になるのかもしれない。

農業では耕作放棄地の話題はよく取り上げられているが、漁業でも同じように高齢化などで、使われなくなっている船が増えている。これについてはあまり気にしたことはなかったので、確かになと思った。三重県では 12000 隻の船のうち、1000~2000 隻は使われなくなっているのではないのだろうか。長年使っていた船は愛着も相当だろうから、使わなくなったからといってすぐだれかに売るとかもなかなか上手いいかないのだろうと思う。

相差の町を歩いていると陸に上がった漁船が確かに多く目についた。再び使われる日は来るのだろうか。一方で、港では木組みの上に船をあげて底のペンキを塗りなおしているおじちゃんがいた。なんとなくすごくいい風景だなんて思う。人が手をかけて生業に精を出す風景だからかもしれないし、あるいは海と人との接点が感じられるからかもしれない。

海の博物館では、そんな使われない船を地域の漁協と協力して、多くの船が流されてしまった東北の被災地へ送る活動を草の根的にやっているそう。博物館として、昔の海の暮らしの記録だけでなく、知識やネットワークを利用して今の海の暮らしをも支えるすごく大事な役目を担っているんだと思う。

そして、でもそれは津波の話が他人ごとではないからなのかもしれない。今回の津波は

三重でも陸地への被害は少なかったものの、海に浮かべていた牡蠣の養殖筏が潮流の変化によってたがいにつかりほぼ全滅してしまった。こんなに遠く離れているのに、とも思う。石碑など、かつての津波被害の記憶も残されている。そして、海の博物館も、この地に安政の地震では津波が 12m の地点まで来たという碑が残っていたため、標高 12m 前後のところに建っている。

せっかくなら夜にでも海の暮らしについて、みんなで話せばよかったような気がする。またいずれの機会にでも。

最後に今回講師をしてくださった海の博物館の平賀さん、SOS のハタさん、そして見学会を企画してくれた大谷さんをはじめスタッフのみなさま、どうもありがとうございます。

#### [企画者より]

見学会を企画してくれないか、海の博物館に行きたいんだ。という知らせを GSDy 代表から受けたのは春の終わりごろだったように記憶している。三重県は私の地元でもあるし、かねてから話題にしていたこともある。しかし、4 年前に既に GSDy として海の博物館を訪れたことがあった。そのため、この依頼を受けるかどうか少し悩んだが、どうしても、ということで計画を始めた。紆余曲折あったが、テーマは「海に生きること」とした。これは 3.11 の震災を背景としており、沿岸部では大きな津波に襲われ、漁村が丸ごと消えてしまった地域もあった。こういった事態は今後高い確率で日本各地で起こるとされており、私たちは専門家として被災地の復興だけでなく、海とは、漁村とは、という根本的なことを考える必要があると感じていたため少し重いテーマとした。

海に生きることを学び、肌で感じ、頭も心も胃袋も満足した 2 日間だった。平賀さんやハタさんには、無理なお願いをしていたにもかかわらず、約束していた時間をかなりオーバーしてまでたくさんのお話していただいた。とても感謝している。

台風が通過した後だったため海岸には流木などが打ち上げられていたが、秋空は澄み、満天の星空を見ることが出来た。自然の恐ろしさを背景にした見学会だったが、それと同時に美しさも再認識できた見学会だった。みなさんありがとうございました。

大谷友香／東京工業大学大学院

[会計報告]

参加費：13,400 円／人

収入：13,400×7=93,800 円

支出：

レンタカー(2 台)：27,405 円

海の博物館 入館料(7 人分)：5,600 円

宿(2 部屋)：32,550 円

海女小屋(7 人分)：27,200 円

駐車場(大王町にて、2 台)：600 円

ガソリン(2 台)：1,352 円

合計：94,707

※およそ 900 円オーバーしています。気が向いた方は缶コーヒーでもおごってください。

講師代：5000 円(ハタさんのみ)

※平賀さんは固辞されたので、またみんなで来ますという堅い約束を交わしました。

資料印刷代：モノクロ 3 枚×8 名分=24 枚⇒120 円

報告書印刷・郵送代：カラー6 枚×2 名分=12 枚⇒120 円

封筒 210 円+郵送代 240 円=350 円

合計 590 円

※GSDy の予算からは講師代と資料印刷代、報告書郵送代の補助を頂いています。